

「市民参加懇談会 in 福島」開催について (検討用ペーパー)

1. テーマ候補について
 - 大テーマ候補
 - ・「原子力とともに暮らす」
 - ・「知りたい情報は届いていますか」
 - 小テーマ
 - 小テーマについては、引き続きコアメンバー会議で検討する。
2. パネリストの候補について
 - 小テーマに応じてお願いする方を選ぶ。
(その際、これまでのように有識者に直接お願いするか、意見募集者の中からパネリストをお願いするか検討する)
3. 開催日候補
 - 4月もしくは5月の土曜日
4. 会場候補
 - 富岡町内の会場 (検討中)
5. プログラム案
 - 1) 座長報告 「市民参加懇談会について」 木元座長 (約5分・予定)
参加コアメンバーからもお聞きしたいことなどを発言するか。
 - 2) 第1部 パネリストから問題提起 (約1時間30分・予定)
〔司会・進行〕コアメンバーより1名

~ 休憩 (15分程度) ~
 - 3) 第2部 会場参加者からご意見を聴く会 (約2時間・予定)
〔司会・進行〕第1部と同じ方

福島県エネルギー政策検討会「中間とりまとめ」に対する意見の例

○原子力政策の決定プロセスについて

- (1) 情報公開が十分に行われていない。
- (2) 政策に広く国民の声が十分反映されていない。
- (3) どこで原子力政策が決定されるのか不明である。

○エネルギー政策における原子力発電の位置付けについて

- (1) 原子力は必要、原子力推進は妥当である。
- (2) 原子力は不要、原子力政策の見直しを、原子力発電から転換すべき。

○電力自由化の中での原子力発電の位置付けについて

- (1) 自由化の中では成り立たない。

○原子力発電所の高経年化対策について

- (1) 適切に進めることができるか。

○高レベル放射性廃棄物処分について

- (1) 実現可能性はどうか(処分地決定について)。

○電源立地地域の将来について

- (1) 発電所の立地は電源立地地域の将来にわたる振興に寄与できるのか。
- (2) 廃炉を見据えた地域の将来を考える時期にあるのではないか。

○核燃料サイクルについて

- (1) 核燃料サイクルは現段階で必要不可欠なものと言えるのか。
- (2) 核燃料サイクルは経済性に問題はないか。

○原子力政策の決定プロセスについて

(1) 情報公開が十分に行われていない。

- ・ 国は節電を訴えながら夏の消費電力が多いことが良いことのようなニュースを流す。私達は何を信じれば良いのか。(中通り)
- ・ 国・電力会社に都合の悪い情報が隠されてきていることは、今回のトラブル隠しからしても明らかである。公平・客観的な判断をするには、正確・的確な情報提供が必要である。(会津)
- ・ 情報公開により国民がよくわかるようにすること。(中通り)
- ・ 情報公開が十分に行われているとは思えない。(中通り)
- ・ 情報公開の徹底を。(中通り)
- ・ 原発立地地域の住民に十分配慮した施策と徹底した情報公開、原子力政策の国民参加を強く要望する。(浜通り)
- ・ 「政策決定プロセス」については、「ガラス張りの行政」が叫ばれて久しいが、「情報公開」は極めて重要である(中通り)
- ・ 安全が立証されていないものを、国や電力会社に都合のいい情報だけ知らせながら、だまし騙し使用するのをやめて欲しいと強く抗議する(会津)
- ・ 危険で高コストのものを採用するということを国民に隠したまま一方的に推し進めたうえに、不正な点検をし責任もとろうとしないエネルギー政策をやめてほしい。(中通り)
- ・ 東電や国は原発の危険性についてきちんと説明すべきである(中通り)
- ・ 原発から出る放射性廃棄物の後始末もできず、事故の危険性については語らず、原発のメリットばかり宣伝し県民を騙してきたことは許せない。(中通り)
- ・ 難解な構造を持ち、実像が捉えにくいと感じている原子力発電に対して、市民は率直でわかりやすい解説を望んでいる。東京電力の虚偽報告・隠蔽問題以降は、特に客観的な事実究明を望む声が高まっている。(中通り)
- ・ エネルギー政策に立ち向かうことは、技術体系と向かいあうことでもある。私たちがエネルギー政策や技術についての基礎知識、専門知識、最新情報を入手・学習できる機会が必要である。(浜通り)
- ・ 原子力発電については、建設、維持、管理、廃棄物、撤去等に莫大な費用、時間を要する。また、政治的偏見から国の無理押しが見え隠れしており、メリットのみを公表され、デメリットの大きさが示されていない。(中通り)
- ・ 国民への情報公開が足りない。もっと、透明な情報公開を望む。原子力政策の決定がどのように行われているのか、もっと国民にわかるように説明してほしい。(会津)

(2) 政策に広く国民の声が十分反映されていない。

- ・ 「もんじゅ」の事故後、国は原子力に関する円卓会議などを行って、国民の意見を聞くジェスチャーはとったが、そのメンバーの殆どは原子力肯定論者で占められ、しかも結論は官製のものを追認させるという意味で茶番に思えた。福島で行われた科学技術庁主催のシンポジウムも聴いたが、国側の専門家の話がまず推進ありとする傲慢な姿勢であるのに比べ、慎重派のパネリストの話の方が、はるかに理路整然としているように聞こえた。専門家に任せておくのはよくないということを国民や県民に知らしめた意味で、茶番でもこれらが実施された意義は評価できる。逆に言えば政策決定の民主化に対する国の意識はまだまだということになる。(中通り)

- ・ 政策決定過程では、民主化を図り、市民の意見を十分に反映させてほしい。(中通り)
- ・ 原子力政策に私は声をあげていきたい。国民の意見を反映させていく仕組みをつくってほしい。(中通り)
- ・ 私たちが自らのことを自らで決めたいと決意することがある(最近では、福島第一原発の増設の是非を県民投票で決めようとの動きがあった)。そのようなことも可能とするようなしくみを設計していくのも、私たちのエネルギー政策の中では必要と考える。(浜通り)
- ・ 国民の声や要望が取り入れられるような風通しの良い政治体制を望む。(会津)
- ・ どのような政策をすすめていったらよいかを政治家にばかり頼るのではなく、これからの時代は官・民・産が一体となって考えていく体制が必要である。こうした意見を述べる場をこれからも増やしてほしい。(会津)
- ・ エネルギー政策は国の専権事項との主張もあるが、いかなる政策であれ、民主主義の原則からいっても住民の意見を尊重するのは当然であり、それをふまえて地方自治体が提言することに何の問題があるのか。現在の国の進め方は、トラブル隠しに典型的に見られるように、まずいことを隠して強引に政策を押し付けているとしか見えない。(会津)
- ・ 私たちがエネルギー政策に様々な形で参画するためには、必要な情報がいつでも、誰でも、どこでも、なんでも、体系的かつわかりやすく提供するしくみが必要である。その整備の一部は県が担う必要がある。例えば、国や県の意志形成過程の情報や、国の政策への「反対論や都合の悪い情報」など、政策を判断し、行動を起こすためには、政府広報や新聞報道だけでは不足である。(浜通り)
- ・ 抽象的、技術的なテーマの場合、私たちになじみが薄く、大事なことにもかかわらずなかなかプロセスに加わらないことも多くある(国のパブリックコメントでも意見が1桁というのは珍しくない)。そのような場合に、後々施策の実施において不満・苦情が多くなることを避けるために、テーマを理解できる場や手段を提供してほしい。(浜通り)
- ・ 科学や技術の導入など未来の方向性を探る場合や社会的にこじれてしまった場合(数十年も原発立地が進まない等)では、資料にあるコンセンサス会議で着地点を探ることも必要と考える。(浜通り)

(3)どこで原子力政策が決定されるのか不明である。

- ・ 国全体として原子力技術をどう展開するかという、巨大で強大なシステムを前にしたとき、既存の体制を国民の側からのものに作り替えることは当事者だけではできないであろう。(中通り)
- ・ 原子力政策を誰が決定しているのか不明確で、安全性についての判断も信頼できない、というのは、民主主義の制度下では許されないことである。(中通り)
- ・ 国の原子力機関には、奥行きのない薄い部屋ばかりが軒を連ねている感じで、山積みの問題を先送りするだけの機関だと言う実体が露呈された。同時に、このシステムを変えない限り同様のトラブル再発の危機感を拭い去ることができない。(会津)
- ・ 電力の基本的な取り組みを国政の場で真剣にとりあげること。(中通り)
- ・ 原子力発電はエネルギー政策のうちの一部であり、エネルギー政策全体の検討や議論を各分野の専門家を含めてもっと深く行って、エネルギー政策としての方針を決定してほしい。(浜通り)
- ・ 国会審議の中で原子力政策を明確にすべきである。(浜通り)
- ・ 政策は国会審議を原則とし、総合エネルギー調査会は解散したほうがよい。「中間とりまとめ」でいう「仕組みづくり」、または知事の主張するコンセンサス会議の導入により、国民的論議と合意形成を図るよう、国は早急に検討すべきである。(浜通り)

- ・ 原子力発電問題は、単にエネルギーの生産に関する政策問題ではなく、中央と地方とのバランスのあり方の再噴出であって、地方自治を無視する、まさにブルドーザー方式といえよう。(会津)
- ・ 国のエネルギー政策については、多くの疑問がある。まず国民の安全確保と情報公開、そして責任の所在等々根本的に不透明なこと。また、競争社会で生き残ろうとする事業者の側に立った政策は、国民不在であり許し難い。根本的に見直すべきと考える。(中通り)

○エネルギー政策における原子力発電の位置付けについて

(1) 原子力は必要、原子力推進は妥当である。

- ・ 安全性の確立を図り、安全な原子力時代を作るべきである。本県は電力に歴史をもち、基盤もできているので原発の立地条件が良いと思われる。他県に負けず率先して原子力エネルギーに取り組むべきである。(浜通り)
- ・ 脱原発を目指す県の姿勢は理解できないことはない。ただ、原発は相双地区の基幹産業であり声高に脱原発を叫んでみても、その先の生活はどうなるのか不安に思っている人も多いはずである。(浜通り)
- ・ 私達の豊かな生活は、原子力発電を含む電力の安定供給の上にあることを強く認識すべきである。(浜通り)
- ・ 国は電源地域の安全性の確保と、東京など電力大消費地の住民に知事が問題としている内容の重要性を理解していただく努力をしながら、原子力発電を推進していくことを望む。(中通り)
- ・ 日本のエネルギーセキュリティー確保や環境問題から、原発推進に賛成の考えを持っている。(浜通り)
- ・ 原子力発電は、エネルギー受給率を高めている、CO2の削減にも大きく貢献しているなどの点から、将来的にも日本の基幹エネルギーとして位置づける必要がある。(中通り)

(2) 原子力は不要、原子力政策の見直しを、原子力発電からの転換をすべき。

- ・ 先行きも、しっかりとした展望もない原発の廃炉のためにがんばってほしい。(中通り)
- ・ チェルノブイリ事故で分かったことは大きい。こんな大きな事故が起きたときの被害を考えたら、今ここで福島県で原発を進めるのは間違いである。これからは自然エネルギーに力を入れていくべきである(中通り)
- ・ 原子力発電は危険で、自然エネルギーは安全なので、そちらのほうに切り替えて行くべきだと強く感じる。未来のことを考えれば、是非とも福島県で脱原発の方向に向かうことを望む。自然エネルギーは安全で、かつコストも安く、これからは不可欠になる。これからは自然エネルギーに力を入れていくべきである。(中通り)
- ・ 原子力エネルギーのクリーンさと膨大さは素晴らしいが、廃棄物の恐さをはかりで計ると、evenなのではないか。廃棄物の為に費やすエネルギーは、私たちの世代ばかりでなく何億年の先まで続くことを考えれば、今私達が選択する方法として不適切なのではないか。(中通り)
- ・ 原子力を国策として保護してきた半面、さらに喫緊の省エネルギーの促進や自然エネルギー技術の普及が阻害されている。環境重視の時代への転換を、原子力が邪魔している形である。これらは、原子力が国民に支持されない一つの大きな背景になっている。(中通り)

- ・ 放射性廃棄物の問題を考えれば、原子力は後世に大きな負の遺産を残す。コストの面でも、建設から廃炉まで莫大な金額がかかり、事故が起きた場合は国家予算の2倍もお金がかかる。これを一体誰が負担できるだろうか。(中通り)
- ・ 専門家による多角度からの考察結果で、巨額資金を要する原子力依存は良策でないとの結論を、国は真摯に受け止めて、他のエコエネルギー開発への取り組みを要望したい。(会津)
- ・ 世界的な潮流・傾向や昨今のトラブルの頻発等を考慮すると、脱原発に舵を切るのは必然で、必要ではないか。(中通り)
- ・ プルサーマルはもちろん、原発に依存する今の政策を、即方向転換してほしい。(会津)
- ・ 人間のやることに完全はない。間違ったり、ミスを犯したりしたとき、原子力発電は危険が大きすぎる。やはり一人一人が節電をしながら、自然エネルギーに切り替えていくことを求める。(会津)
- ・ 国は原子力政策を見直すべきと思うが、原子力エネルギーなしで、現在の電力消費を賄えるのかも不安である。(会津)
- ・ 原発増設はやめて、設置したものは耐用年数がきたものは発電を中止し、後始末をきちんとして近くの住民に危害を与えないようにしてほしい(中通り)
- ・ 世界の趨勢は今、脱原子力、環境に優しいクリーンエネルギーを模索している。日本政府が目指している原子力政策は間違っている。福島県も今回の現実を重視し、脱原発をうたうべきである。日本でも有数の原発県がストップ原発のファシリテーターとなれば、素晴らしいことである。(中通り)
- ・ 企業はいままでマスメディアを通じて、特にテレビなどで、原発の安全性とクリーンさ、環境に優しくコストパフォーマンスも良いなどと宣伝してきたが、すべて嘘だった。発電コストなどは、炉を閉鎖した後の管理費や、解体費用なども入れた計算をしていたのか。(中通り)
- ・ 原発の廃止を前提に、これに代わる電源開発(太陽・風・波・地熱等の利用拡大)も、大きく提言できる検討会であってほしい。(中通り)
- ・ 放射性廃棄物の問題一つをとってみても、子供たちの未来にも大きな犠牲と負担を強いてしまう気がしてならない。どうか目先の利にとらわれないでいつまでも安全で安心してくらしていけるよう脱原発、そして自然エネルギーへの転換を強くすすめてほしい(中通り)
- ・ もう原発はいらない。現在原発が止まっているが、なんら東京で不足しているというニュースはない。この機会にぜひ永久に停止してはどうか。核燃料ごみの最終処分が決まらないまま、後の世代に負の遺産を残すべきではない。(中通り)
- ・ CO2削減に有効との主張は、全く世界には通用しない。むしろ事故が起きたらどうなるか。コスト論としても、原発が高上がりになることは、廃棄処理の経費を考えれば明らかである。そもそも廃棄物の最終処理の問題が片付いていないのだから、運転すべきではなかった。(会津)
- ・ トラブル隠しなどにより原発が停止しているにも関わらず、電力供給が滞っていない事実に見られるように、原発にのみ大きく依存する必要がないことは明らかである。自然エネルギーを促進すべきとしても、原発の増設は不要である。(会津)
- ・ 原発にしがみつより、新エネルギーに関する技術開発に投資した方が日本の将来にとっても有利なはずである。(会津)
- ・ どんなに立派な安全維持基準をつくっても、老朽化している原発の事故は発生し続けるであろう。負の遺産はこれ以上残すべきではない。今こそ安全なエネルギーに方向を転換すべきである。(中通り)
- ・ 事故が起きれば長い間にわたって人々や環境を苦しめ、建設や解体に巨額の投資を必要とするにもかかわらずコストの優位性を強調している。核燃料サイクルは本当に必要なことなのか等、本当に重要なことが国民に問われないままに政策が進んでいる。(中通り)

- ・ 核廃棄物の最終処理が確立されていない中、これ以上の核廃棄物の発生は「子孫に負の遺産を残さない」ためにも中止すべきである。(中通り)
- ・ 国は、県の中間報告にあるような疑問点に誠実に答えることから出直して、この危険な原発や、核燃料サイクルについて、もう一度考え直してほしい。(中通り)
- ・ 私たちの世代が豊かな生活をした後に残る危険な核のごみを次世代に残すというのは、人間として恥ずかしい、耐えられない。核燃料リサイクルや余剰プルトニウムの問題も、結局はこの恐ろしく危険な放射性廃棄物の問題から生じてくる問題である。今私たちはこういうことをあらためて考え直すときにきている。(浜通り)
- ・ CO2 削減や環境保護を考えたとき、再生可能エネルギーなどの新エネルギーの開発や改良が最も重要で、多くの問題と放射性廃棄物を次世代に残す原子力発電は今後は徐々に削減していくべきである。(浜通り)
- ・ 世界の流れが脱原発に向かっている現在、日本も自然エネルギー利用のエネルギー開発に努め、脱原発に向けて出発する好機である。その方向に向かうことを切望する。(中通り)
- ・ 原子力発電は、原子爆弾と同様に人類が犯した大きな過ちである。一人の人間のミスが、地球の破滅につながるようなことを、人類はやってはいけない。高経年化して、応力腐食割れが多発して、ますます危険になっている。間に合ううちに、人類の理性を結集して、一つ一つ廃炉にしていきたい。(中通り)
- ・ 原子力発電は地球温暖化防止の手段にはならない。莫大なエネルギーを必要として、温暖化防止とは全く逆の方向である。(中通り)
- ・ 戦後の復興期に電力がいかに貢献したとはいえ、ウランを燃やした後の処理の仕方や事故の対処法も分からぬまま、見切り発車した原発政策は、有史以来の罪悪である。いかに安全に継続するかではなく、即、廃止の方向で進めなければならない。国も一刻も早く安全なエネルギーの開発に取り組み、既に天然ガスや太陽・風利用など進んでいる生産を助成することが先決である。国民の安全、将来への展望という見地に立てば、採算を度外視してもやるべきである(中通り)
- ・ 原子力発電については発電量の大きさについては評価できるが、使用済核燃料の貯蔵についても、またプルサーマルについても最悪の危険と裏表の関係にあり、地域の住民は元より常に不安な状態にある。これからは太陽光発電を一般住宅に普及し、各家庭(普及を将来50%~60%)の使用電力量の10%位まで補給できれば、それらの余力電力を企業に振り向けることで、原子力発電を縮小することができるのではないか。(中通り)
- ・ 自然災害、テロ等、今の世界情勢をみると何があっても不思議ではない。そうした危険を冒しても、原発を推進する理由は何なのか。(中通り)
- ・ たえず重大事故の危険性をはらんでいること、近い将来巨大な核のゴミになることは明白であることから、原子力によるエネルギー政策の早い終焉を望む。(中通り)
- ・ 何故、国は原子力エネルギーに固執するのか。高レベル放射性廃棄物の処理に限っても、後の世代への「負の遺産」となる。循環型社会を標榜するとき、原発は21世紀には全くなじまない。(浜通り)
- ・ 高レベル放射性廃棄物の最終処分地の問題も解決していない中で、福島から出る放射性廃棄物は増えるばかりである。国も県も、もとに戻って初めから議論しなおす必要があるのではないか。(浜通り)
- ・ 老朽化した原発は段階的に廃炉にし、欧州の環境先進国のように、クリーンで安全太陽光、風力、燃料電池などの自然エネルギー、新エネルギー推進政策に一刻も早く転換すべきである。(中通り)

- ・ 廃棄物処理の問題が未解決な中で貯る一方の廃棄物、環境に大きな影響を及ぼすことを考えずに、CO2 の排出が少ないことのみを強調して推進することには反対である。(浜通り)
- ・ 「プルサーマル計画」等の原子力政策は、環境破壊、安全性、信頼性など極めて重大な問題がある点は否定できない。(中通り)
- ・ もう少し今の生活を見直し、電気の使い過ぎを改めれば、原発など必要ではなくなるのではないか。何の為に原発を押し進めているのか、国の本当の目的は何なのか疑問に思う。(中通り)
- ・ 原発を廃止し、自然エネルギーの開発を要求する。(中通り)
- ・ 原発立地県として、国の原子力政策の見直しを要求すべきである。(中通り)
- ・ 我々は、原子力に頼るエネルギー多消費文化を継続していくべきなのであろうか。(中通り)
- ・ 自然エネルギー開発で、脱原子力発電。(浜通り)
- ・ 原発大増設路線に根本的にメスを入れ、原子力偏重を転換して、クリーンな新エネルギーなど多様なエネルギー源の開発と利用に本格的に取り組み、原発からの段階的な撤退を目指すべきである。(中通り)
- ・ この福島県から、先陣を切って原発を止めてほしいと願っている。(中通り)
- ・ 「まずはじめに原子力ありき」というスタートではなく、エネルギー政策全般(未来のあるべき姿の模索=あるべきではない姿の反省)を見渡した政策論議からはじめなければ、結局は不毛な利害争いに終始することになる。(中通り)
- ・ 1基5,000億円もかかる原発。長い将来を見ると、環境も含め考えると原発はコスト高である。生命をおびやかす危険を伴う原発に頼らないエネルギー政策の転換を望む。(浜通り)
- ・ 未来の子どもたちに、負の遺産を残すことだけはしたくない。本当に正しい情報、国際常識を全国民に知らせて、今までどおりの大量消費社会で贅沢三昧をして、荒廃した地球を子どもたちに残すのか。今までの暮らし方、価値観を改めて、持続可能な未来社会を作るのか。今まさに選択してもらう時期で、早急な方向転換が必要である。(中通り)
- ・ 原子力発電推進の理由が、地球温暖化対策、つまり CO2 削減のためのクリーンエネルギーだとして、その陰にある原発の危険性、核廃棄物などが隠されたまま国民にPRされ、その責任の所在さえがあいまいなものになっていることには憤りを感じる。(中通り)
- ・ 人類のみでなく、土壌も生きとし生けるものを死の恐怖にさらす最も危険な産業廃棄物が生み出され、処理する安全な方法もないままに、野積みにならざるを得ないことを知り、経済的にも、決して、永続的に人々に還元されることのない原発エネルギー政策を進めないことを、県民、国民として、福島県知事と共に訴えて行けたらと思う。(中通り)
- ・ 環境や人間にやさしいクリーンエネルギーこそ求めていくのが大切である。現在、県内の原発が稼動していなくても私達の暮らしがどうにか回っていることから、原発はなくても良いと言えるし、事故続きの原発こそなくすべきである。(会津)
- ・ 健全性評価の動きは、電気事業者の関心が、償却の進んだ既存炉の効率を上げることに移行しているのを示している。したがって、国がいかに推進の旗を掲げ続け、立地町が誘致し続けても、国が直轄事業として原発建設に乗り出さない限り、数年後には新增設の動きはなくなる。(浜通り)
- ・ 最近の新聞には、環境について本気で心配している10代の若者達の投稿が毎日のように載っている。この様に真剣に未来の地球を考えている子供たちが原子力発電を必要としているとは思えない。いくら地下深くにコンクリート詰めで廃棄すると言っても、そこに地震が来たらどうするのか。地下から自然が汚染されてしまう。万が一、事故が起きたとき、誰が処理するのか。(中通り)
- ・ いったん大事故が起これば、地球規模、人類の存続にかかわるような危険なものである以上、このようなものの存在は、どのような状況下でも肯定されるべきものではない。原発立地地域の経

済性云々というレベルでものを考えるのもまちがっている。百歩譲って、経済的に優れていたとしても、脱原発の方向にゆくべきである。(中通り)

- ・ 国民一人一人が、電気等のエネルギー節約に取り組むとともに、政府・地方自治体も、他国のように地熱・水力・風力発電等に援助を増やしていけば、電気はなんとかまかなっていける。原子力は急いで進めるものではない。原子力エネルギーは縮小の方向を考え、自然エネルギーの開発に取り組むことが大切である。(会津)
- ・ 国は京都議定書の温暖化目標達成を目指すため原発を重視しているが、原発から排出される放射性廃棄物の処分法について最終結論には至っていない。したがって、原発は既存のものを事故発生、老朽化前に廃棄する方向で検討すべきである。(中通り)

○電力自由化の中での原子力発電の位置付けについて

(1) 自由化の中では成り立たない。

- ・ 日本の電力会社が、電気を作らない、金儲けにならない閉鎖した原発を本気で監視し続けるか大変疑問である。(中通り)
- ・ 電力自由化時代に建設期間の長い原発は不用不急の存在となりつつある。エネルギー政策の国際水準は、LNG と自然エネルギーの配分問題にあり、理念も経済合理性もない日本の原子力推進策は既に限界に来ている。(浜通り)
- ・ 電力自由化の時代には、原子力発電所の新增設は経済合理性を持たない。(浜通り)
- ・ 消費者は原子力発電による電気を使うことに関して、あまりにも自覚がないのではないか。自然エネルギーによる電力はコスト高ではあるけれども、わざわざその高い電気を買う人々がいる国もある。原子力も、コスト高でもかまわないという人々に買ってもらえばよいではないか。高い電気代の中には、事故が起きたときの修理費や治療代も含まれていて、それを承知で消費者は電気を買う。さまざまな発電方法による電力の自由競争時代が来れば、それぞれメリット、デメリットを表に出して、消費者の選択を迫らなければいけない。(中通り)
- ・ 企業として、独占から市場競争にさらされれば、効率化、コストダウンを考えるのは至極当然であり、それと相克する公益性や安全の確保は、制度上の歪みも生まれている。こうしたことは電気事業者がいくら努力しても限界があり、国側でどうジャッジするかにある。県の立場としては是非このような現状を勘案し、適切な提言を望む。(浜通り)

○原子力発電所の高経年化対策について

(1) 適切に進めることができるか。

- ・ 原発は巨大技術で未知の要素があるので、安全性の劣る経年炉は40年運転で廃炉にすべきである。(浜通り)
- ・ 老朽化問題とその対策について、さらに具体的に踏み込んだ検討と提言を要望する。(浜通り)

○高レベル放射性廃棄物処分について

(1) 実現可能性はどうか(処分地決定について)。

- ・ 高レベル放射性廃棄物処分地に、住民が立候補する所があるとは思えない。(中通り)

- ・ 脱原発のエネルギー政策を早急に。放射性廃棄物の処分については、さらに困難を極めることは目に見えている。(中通り)
- ・ 高レベル放射性廃棄物処分施設については、これを拒否すべきである。技術的な未成熟もあるが、この場所決定は日本の原子力政策に決定的なモラルハザードを引き起こすこととなる。近年の国の姿勢をみると、地方を兵糧責めにしてHLW処分施設のような施設の誘致に向かわせようとの魂胆があるようにも見える。(浜通り)
- ・ 現在の原発の廃炉については、国民全体が、自分の事として担っていかななくてはならないと思う。(中通り)
- ・ いま多くの住民が求めているのは、安全性を最優先にした原子力政策の確立である。その中でも、万が一の事故に備えた安全対策、防災対策については、現状がまったく不十分であり、この点について、検討会でも抜本的な検討を行ってほしい。(中通り)
- ・ エネルギー政策にあっても、持続可能性は大きな柱の一つとすべきである。これは、原子力のような一般に持続可能性とは縁遠い存在でも追求されるべきことである。(浜通り)

○電源立地地域の将来について

(1) 発電所の立地は電源立地地域の将来にわたる振興に寄与でき

るのか。

- ・ 地域振興については、地方分権進展・拡大のベクトルにあつて地方の自立を前提としたクレームで思索、検討すべきである。原発に付随する電源交付金等の国庫からの財源や原発産業に依存しない体質(地域)に構造改革すべきである。原発におんぶに抱っここの状況では持続可能な自立的な地域振興には繋がらない。(中通り)
- ・ 原発が地域の自立、振興に役立たないことは、立地地域が新たな原発を増設しなければ財政的に苦しい状況にあることで明らか。永久に増設し続けることはできない(会津)
- ・ 原子力発電所は地域振興にほとんど役立ってない。(中通り)
- ・ 地元はやはり原子力産業に頼らざるを得ない状況にあるのは間違いない。(浜通り)
- ・ 発電所以外の産業集積が進まず、電源三法交付金、固定資産税の減少していること、廃炉を見据えた将来を考えモノカルチャー的経済からの自立が求められていること、廃炉後の自立的な地域への円滑な移行が図られるよう制度を整備すべきこと、いずれも県はじめ自治体と住民の論議が必要であり、合意形成が今後の課題となっている。(浜通り)
- ・ 双葉郡には10基の原発がある。世界でも有数の立地点であり一住民として誇りを持っている。決してモノカルチャーではなく、多様な産業が他の地域と同様に育っている。もちろん原発に関わる多くの財源により潤っていることは事実。それから自立するというより、それを誇りとし共存して発展していくことが大切。(浜通り)
- ・ 多かれ少なかれ、立地地域も県も地場産業として、電気事業者のウエイトが非常に高いものと考え、立地地域だけにモノカルチャーと指摘するのはどうか。現状Jヴィレッジをはじめ、核燃料税等々、原子力発電所があるが故、享受を受け、県財政もある程度成り立っているのでは。立地地域に求めるだけでなく県としても依存体質を是正する対策を率先して講じ、立地地域を引っ張っていく図式が目に見える形で活動していくことが大事ではないか。(浜通り)
- ・ 双葉郡の人口は、原発が立地されたことでの増加はなかった。原発は魅力を与えなかった。(中通り)

- ・ 原子力発電所を排除しようとするとき、双葉郡内居住世帯が原発に就労先を求めてきた現実を無視できない。彼らに新たな就労先を提供できなければ、大きな社会問題となる。また、域内に仕事が確保できない状況を考えるとき、人口の流出を想定することは避けられない。こうした状況下で、人口の確保と域内就労先の獲得対象として老人介護を事業とすることは一石二鳥と考えられる。(中通り)
- ・ 双葉郡内には過去の電源立地交付金での箱もの建設により、維持費がかかっているのが実体である。これからもこのために県民の税金は多く費やされねばならないだろう。しかし、一定の脱却が必要である。ある意味では、既設施設の解体事業を双葉郡内への補助金事業として配置することも考えるべきである。(中通り)
- ・ 双葉地区を原発に頼る経済から脱却する地域とするため、また、原発を止めることも含め、県が中心となってその対策を推し進めてほしい。(中通り)
- ・ 貴重な資源であるエネルギー供給基地を地域住民の生活者の安定のために有効活用し、研究開発型産業育成の基盤を構築し、失業者のいない社会を切り開いて行くことも行政の重要な役割ではないか。(浜通り)

(2) 廃炉を見据えた地域の将来を考える時期にあるのではないか。

- ・ 廃炉を見据えて地域の将来を考えることは大いに賛成。ただし、県としてそのための具体的取組みがよく見えない。国や事業者任せのような気がするがどう考えるか。(浜通り)
- ・ 地域再生は、廃炉過程とその後の長期スパンで考え、市民参加システムの構築を前提に、県民・住民の視点に立った政策づくりを進めるべきである。市民は、行政や事業者とのコラボレーションを行い、住民自治の主体性を発揮したい。(浜通り)
- ・ 福島第一7・8号機や浪江小高原発については、10年程度のモラトリアム期間を設け、福島第一1号機が運転開始40年を迎える2011年以降、その時点での社会情勢を勘案し、その時点の人たちに判断を委ねてはいかがか。(浜通り)
- ・ 東京電力は、Jヴィレッジを建設し、その後の運営に深く参画していること、郡内に多くの関連会社を有していること、東京電力が有する経営資源を活用できることから、電力自由化により限定された形にならざるをえないとしても、現実的には福島県と東京電力のコラボレーションにより、廃炉後の地域経営の基盤を作っていくしかない(浜通り)

(3) その他

- ・ 「お金」に頼った地域づくりから脱却して、本来そこに住む人の心がその地域の風土を作りだすことを思いだしてほしい。(中通り)
- ・ 原発後の地域政策にも国への依存(要望・期待)がそこかしこに明記されているが、モノカルチャ一的な経済の依存から脱却すべきと言及もしているのであるから、国への期待や依存は止め自己責任の下積極的に自ら考え自ら実行しうる地域創りが肝腎で、そのことによって、安全かつ快適で幸せな地域生活環境を構築できると思う。(中通り)
- ・ 問題は、危険な原発建設に際し住民を納得させる為巨額の交付金を出した原発推進の進め方にあった。お金で住民の心を買うような進め方は止める。交付金ゼロとはいかないが、適正なレベルまで引き下げるべきであり、そのレベルとは自助努力によって自分たちの町を徐々に活性化するのに役立つ程度ではないか。(浜通り)

- ・ いわゆる原発交付金が当該自治体の財政構造にもたらす問題点、補助金行政の問題点を追及すべきである。(中通り)
- ・ 立地4町内で、原発のスクラップ アンド ビルドで常時10基体制をとれば、出力も増大(46万、78万KW)して、エネルギーの安定供給に寄与し、新規技術で安全性も向上し、地域住民の雇用も拡大する。交付金により地域振興も図れる。誰一人として損をする者はいない。なぜ県と反体制派だけが反対するのか。(浜通り)
- ・ 双葉郡も、即効型の産業復興ではなく、20年先を見越して、今、地元の高校生に、技術育成をはかるべきである。背景は、原子力発電所に事故が起こった場合、風評被害も含めて、双葉郡は孤立する可能性がある。その時にこそ、地産職人の育成効果が発揮されるのである。(中通り)
- ・ 放射能汚染地域からは移出できるものはなくなることを前提に産業起こしを。原発が事故を起こした場合のその後を今から意識した双葉郡地域の産業を考えておくべきである。(中通り)

○核燃料サイクルについて

(1)核燃料サイクルは現段階で必要不可欠なものと言えるのか。

- ・ 核燃料サイクルを推進する論拠として、エネルギー資源の海外依存、とりわけ原油の中東依存からの脱却が根拠とされることが多いが、ウランの供給は安定しており、また、原油は電力以外の動力用途も多く、核燃料サイクルによってエネルギー安全保障が実現するとはどういえない。(浜通り)

(2)核燃料サイクルは経済性に問題はないか

- ・ 核燃料サイクルはコスト面、プルトニウムの需給面、危険性の面などから実現は難しい。(中通り)
- ・ 核燃料サイクルを推進する論拠には疑問があり、一方、経済面、環境面でリスクが大きいことから、福島県としては、核燃料サイクル、その中核をなす再処理政策には消極的な対応をとるべき。(浜通り)
- ・ 再処理コストやバックエンドコストが明確にわかりません。(会津)

(3)その他

① 肯定的な意見

- ・ すでに海外で再処理済のプルトニウムは、安全上もほぼ同等なので速やかにプルサーマルで処理すべきである。(浜通り)
- ・ 地域の第一安全を考えながら邁進する事によって地域の信頼回復に努めて行けば、いずれはプルサーマル政策が次第に受け入れられるようになり、やがてこの地域にも軽水炉を主体とした核燃料サイクル事業がやって来るよう望む。(浜通り)

② 否定的な意見

- ・ 六ヶ所村の再処理工場は、絶対にウランを通してはならない。膨大な核汚染施設ができるだけである。(中通り)
- ・ プルサーマルについては、東電の安全管理能力の低さ、不誠実さにおいて受け入れるべきではない。(中通り)
- ・ 安全性が確立していないプルサーマル実施には反対。核燃料サイクルは机上の空論である。(中通り)
- ・ プルサーマルの扱いについては、安全性の見地からのさらなる検討が必要。余剰プルトニウムをどうするか、これこそ核燃料サイクル政策そのものの矛盾であり、原発立地県に押し付けられてすむものではない。県は、安全性についての検討も改めて行い、安全だといえる根拠について説明すべきである。(中通り)
- ・ プルサーマルについてはさまざまな問題点があり、絶対に許可をすべきではない(浜通り)
- ・ プルサーマル計画は中止してほしい。様々な危険性が明確になっている今日、一つとして疑問がなくなる中で実施する事は暴挙でしかない。(中通り)
- ・ 核燃料サイクルを、一番最初のウラン採掘での被爆から再処理コスト、バックエンドコスト、労働者被爆を考えれば、NOと言わざるを得ない。(浜通り)
- ・ 「プルサーマルが危険というならウランも危険」とは、少なくともBWRでは言えない。プルサーマルの実績の大半がPWRで、「ふげん」「高浜」は炉の構造が全く異なり、国内で唯一BWRの実績がある「敦賀」も燃料集合体2体だけの装荷。福島でのプルサーマル計画は、実験炉、原型炉、実証炉の段階を一気に飛び越えいきなり商業炉で実施するものである(浜通り)

③ 使用済燃料対策の問題について

- ・ 燃料を再処理しない方向になった場合は、福島県は自分のところで永久保管する覚悟があるのか。それとも、国の問題と他人事にするのか。そのような場合を考えた展望を持っているのか(浜通り)
- ・ 再処理の予定の無い使用済燃料は青森では受入れないので、原発内貯蔵を行うべきである。(浜通り)
- ・ 原子力発電所は、自ら生産した核のゴミに、発生者責任を負う義務がある。国の政策が実を結べば、福島原発の核のゴミは県外に運び出されるであろうが、原発は「トイレ無きマンション」に例えられるがごとく、核のゴミを喜んで引き受けるような奇特な人はいないだろうし、県外に持ち出されるなら、いかなる事態も門外漢であるといった身勝手さをもつ福島県民にはなるべきでない。原発施設の中に核のゴミは保管すべきである。(中通り)
- ・ 福島第二の燃料プールがあと1回の燃料交換でパンクする現実も直視しなければならない。当面、福島第二対策には、福島第一の共用プールを活用するしかない(浜通り)
- ・ 「中間貯蔵施設」の新設は10年程度のモラトリアム期間を経た後、次世代がその時点の社会情勢のもと判断すべきで、ここ数年の間に議論すべきことではない。なぜなら、最終処分の行方も核燃料サイクルの行方も不透明だから。(浜通り)
- ・ プルサーマルを拒否した場合、原子力委員会や資源エネルギー庁は、使用済核燃料の搬出先がなくなり原発の運転に支障が生じると主張しているが、現時点ではまともに議論をする必要はない。安易に中間貯蔵の議論に乗ることは、国の原子力政策の転換を遅らせるだけのことでしかない。国と県、立地町の我慢くらべであり、国の政策転換を促す以外に解決策はない。(浜通り)